

かまくら 女性史の会 Newsletter

第132号
2025年11月22日 発行

〒248-0012 鎌倉市御成町 18-10
NPOセンター鎌倉 気付
メールボックス 26
E-mail: syokmat@yahoo.co.jp

《フローレンス・ナイチンゲール記章と岩田ウタ その2》

ウタは父岩田富五郎と母岩田きいの子として姉、兄武一、妹つる子の4人兄弟の3番目に生まれた。父は1921年9月に行年39才で亡くなっているので、ウタが3才の時である。母きいは乳飲み子を抱え4人の子どもたちを育てた苦労は想像に余りある。兄は陸軍曹長として1945年10月にミンダナオ島で戦死、行年31歳だった。母きいは57年に墓を建立し68年行年80歳で他界した。ウタは受賞の2年後97年10月21日に母と同じ行年80才で亡くなった。生涯独身であった。

ウタがどこで育ったのか、常立寺では「檀家さんのほとんどは腰越や片瀬の人たちです」との説明だったが、生家の場所は特定できていない。鎌倉郡腰越村は39年に鎌倉市に合併、鎌倉郡片瀬村は33年に鎌倉郡片瀬町となり47年に藤沢市に編入され、藤沢市片瀬となった。

ウタは高等女学校を卒業して1935（昭和10）年4月に日本赤十字社中央病院救護看護婦養成所に入学第60回生で同期の入学者は100余名、38年の卒業時に86名であった。ウタの手記「昭和前期の日赤看護教育を受けて」（日本赤十字社看護婦養成百周年記念誌/平成4年発行）によれば、33年12月「日本赤十字社救護看護婦生徒救護看護婦長候補生養成規則」が制定され翌年からの施行で、ウタの入学は適用2年目となった。規則は入学資格を高等女学校卒又はこれと同等以上の学力を有する者とされ、基礎学力のレベルアップとカリキュラムの改編だった。資格適応は日本赤十字社と聖路加に限られたが、将来の展望に立てば英断であったと記している。入学時に新しい寄宿舎（養心寮）に入寮し洋式の設備が整った文化生活を体験した。この寄宿舎生活を単なる集団生活の場でなく日常を通じて看護婦の資性涵養の場とも捉えていた事は教育の重要な役割で、1935年を「日赤看護教育近代化の始期」と評価した。

講義は看護史を除く専門科目の大半を医師が行ったが、現場の臨床実習指導は卒業生の看護職が行いきめ細かく厳格に指導され生徒たちの緊張度が高かった。生徒は2組に分かれ講義日と実習日が交互にあり、実務練習には看護演習と病棟実習があり、看護方法は院内で統一された。これは「赤十字看護方式」ともいべきもので、現今の「看護基準」に相当する重要なことであったと記している。

38年3月に上記養成所を卒業したウタは日赤中央病院や横須賀海軍病院、野戦予備病院等に転属派遣された。戦中から戦後にかけて日赤神奈川支部や国立久里浜病院で看護婦長として働き54～75年まで関東通信病院に総婦長として勤務した。関東通信病院は日本電信電話公社（現NTT株式会社）の中央基幹病院20数万の従業員を有する企業内病院である。ウタはこの時期に電々公社の分譲地、秦野市に居を定めた。82年まで東邦大学医学部付属大森病院看護部長、87年まで日本看護協会出版会副社長を歴任した。

（その3に続く） 2025年10月15日 かまくら女性史の会会員 山根信子 横松佐智子